

愛宕山は京都市の北西、かつての山城国と丹波国との境界に位置しており、最も高い朝日峰で海拔924mです。昔話によると、東の比叡山(848m)と覇を競ってケンカをしたらしいですね。その時、比叡山が愛宕山を叩いたのでコブができて、比叡山よりも高くなったとか……。

天正10年(1582)5月27日、明智光秀は連歌師の里村招巴を伴い、愛宕山の**愛宕神社**に参詣をしています。目的は神宮寺である**白雲寺**の愛宕権現(**勝軍地藏**)への戦勝祈願です。祈願をすれば必ず勝利を得るとの信仰が戦国武将の間で広まっていたのです。翌日は宿坊・威徳院にて連歌会を催し、世に有名な発句「時は今 天が下しる 五月かな」を詠んでいます。**本能寺の変**が起きたのはその4日後、夜が明けきらぬ時刻でした。光秀の祈願は中国遠征(毛利氏討伐)のためではなく、織田信長を討つためであったわけですね。皮肉なことに、豊臣秀吉も徳川家康も篤く信仰したということですから、光秀の祈願は成就したのか、それとも……。

さて、愛宕山は本年で**開山1300年**を迎えました。ここは修験道の開祖と呼ばれる役の行者と加賀白山ゆかりの僧・泰澄によって開かれたとの伝承を持つ霊山です。愛宕神社は全国各地にある愛宕社〔43都道府県に分布し、小社も含めると数は1500社を越える〕の本社として、主祭神は火の神・^{かぐつちのみこと}迦遇槌命、昔から^{ひぶ}火伏せ(火除け)の神として尊崇されています。昔なら^{かまど}竈、今も台所などに「阿多古祀符^{ひのようじん} **火迺要慎**」と書いた火除けの御札を貼り付ける家庭は多いようですね。

ひのようじん 火迺要慎

難しい読みですが、^の「迺」は「すなわち」という意味がありますので、全体としては「火、すなわち慎むを要す」と読むのではないかと思います。

「伊勢に^{ななたび}七度、熊野へ^{みたび}三度、愛宕さんへは^{つきまい}月参り」という唄があるように、伊勢や熊野へは一生のうちで数えるほどしか行かないのに、愛宕へは毎月欠かさず**代参講**(参詣目的のグループで、代表者がお参りをする。通常は交代制)をするなど、庶民信仰は絶大だったようです。とりわけ、毎年7月31日夜半から翌朝にかけて参詣すれば千日分の功德があるとされた**千日詣**が盛んです。当時から男女が群がって登ったようすし、**狂言**「愛宕詣」とか**落語**「愛宕山」でも男女が賑やかに登場しています。修験道の山とは言いながら女人禁制ではないみたいですね。そして代参講では宿坊で上述の^{ひのようじん}「火迺要慎」の御札を求め、帰路には^{しきみ}榊を買って講の全員に配布するわけです。**榊(シキミ)……榊(サカキ)とよく似た小高木の枝葉。仏前に供える。「シキビ」ともいう。**

さらに**三歳詣**というものもあって、これは3歳までにお参りすれば、一生火災の難を免れると言われるものです。昭和初期の頃は、親が3歳児を背負ってお参りを果たしますと賞状のような証明書をくれました。それを誇らしげに見せてくれたおばあちゃんが居りますよ。火事はおろかヤケドも負ったことが無いとのことで、亡き母親に感謝しているとも言われていました。

かような具合で、京都の人は愛着を込めて「**愛宕さん**」と呼んでいますよ。

火伏せの祈り

明治以前には**神仏習合**ですから神社と寺は同居が当たり前、寺僧が神職を兼ねておりました。愛宕山も下記のようになっていますが、明治の**廃仏毀釈**で白雲寺は完全に破却となります。

(この時、**勝軍地蔵**は幸いにも破却から免れて、西山大原野にある金蔵寺に移されています。)

愛宕神社本宮に愛宕山大権現として**勝軍地蔵**……光秀が祈願したものです

同じく奥宮に天狗である**愛宕太郎坊**……火を鎮める霊力を持った異能者の象徴です

神宮寺として天台宗・真言宗両義の**白雲寺**……ここの宿坊・威徳院で光秀は連歌会をした

その愛宕山ですが、山城国と丹波国との境界にあるために、一方では**境界を守る存在**としても崇められてきました。麓の里村に、あるいは京の都に悪霊が降りて来ないようにとの願いです。実際に山陰地方との交通の要衝でもありました。都から見れば東北に比叡があり、西北に愛宕があったというわけです。火伏せといい防衛といい、愛宕山はガードマン役でしょうか。

さて、愛宕神社は**火伏せの神**として篤く信仰を集めていますが、その愛宕信仰に端を発したと思われる**「松上げ」**という火祭りが、盆行事(送り火・精霊流し・万燈籠)と同じ頃に行なわれます。言葉では表現が難しいのですが、運動会の玉入れと似た要領で、手にした松明を放り上げ、地上20m近い柱の上に付けた籠状のものに着火させるわけです。つまり、**愛宕山への献火**なのです。日没後の行事で美しい火の祭典です。HPなどで**「花背松上げ」**とアクセスしてみてください。

燈籠木〔トロギ〕……高い檜(ヒノキ)の柱。先端に杉葉を詰めた傘状の籠〔モジ〕を付ける。

上げ松……放り上げる松明のこと。縄で結わえてあるので、クルクル回して放り上げる。

ところで、ほぼ同時期に同じように火を用いるので誤解されますが、盆行事と松上げとは全く別物です。盆行事は先祖供養のための火であります。それに対して**松上げは、火伏せの加護に感謝するための献火**であって、愛宕信仰そのものです。本来は先祖供養とは無関係で、開催日も**地蔵の縁日(24日)**でしたが、近年は盆帰りの時期に合わせないと人手が足りない事情も手伝い、盆行事の一つとして紹介されてしまうケースがあるようです。

愛宕社が全国に存在していると申しましたが、このような松上げ行事が丹波地方はもとより、若狭地方、さらには北陸から東北地方にかけてまで分布しております。但し、それぞれの地域の民俗のあり様と交じり合い変容したようで、花背の松上げの様式とは全く同一ではありません。例えば、有名な青森の**「ねぶた祭り」**ですけれども、武者絵などを表わした、あの大きな扇灯籠も同じ根っこを持つのではないかと考えられているくらいなのです。

付け加えるならば、愛宕信仰を直接的に伝えていった主体者は**修験道の山伏**かと思いますが、彼らは「愛宕聖」などとも呼ばれています。山岳部を辿っては拠点となる場所で**柴灯護摩**^{さいとうごま}の儀式を行なったことでしょう。異能者による「火伏せ」の秘儀であります。たまにテレビでも「火渡り」のシーンを映しておりますが、あれもその一つです。人々が恐れる火というものを、いとも簡単に操ってみせるわけですね。驚きとともに、ぜひともその霊力〔靈験〕にあやかりたいと願うのも至極当然かと思われま。私は験してみたことは無いのですが、実際にやってみた人の話ですと熱くは感じないとのこと。皆さんも機会があればお験しあれ。

愛宕山ガイド

^{かわらけ}
【土器投げ】 参詣の道すがら、見晴らしのよい崖があって、茶店で一服の傍ら遊興のための「土器投げ」が出来ます。素焼きの小皿を風に乗せるように放り投げる遊びです。麓からずっと登り詰めに来たので、ちょうど頃合の気晴らしにもなりますしね。
狂言『愛宕詣』や落語『愛宕山』でも、ここのシーンが見所・聞き所となります。

【水尾村】 昔から檜が自生する地域だったようで「檜ヶ原」とも呼ばれていました。山林農家の副業として、愛宕山参詣の人々を相手に宿を提供するとか、檜の販売をしていました。かつては水尾の女性＝檜の行商販売という評判が定着していたようですが、今日ではそういう姿も少なくなり、「**柚子の里**」としての方が有名になりました。

あたご山檜の原に雪つもり花つむ人の跡だにもなき 曾禰好忠（曾丹集）
 時雨つゝ日数ふれどもあたご山しきみが原の色はかはらじ 藤原顕仲（堀川百首）
 また、かつては隠遁生活の場として選んだ貴人も多く、なかでも**清和天皇**は筆頭格です。遺骨は水尾村に葬られ、「**水尾天皇**」との異名があります。

【愛宕山鉄道】 参詣者が多いことを当て込んで、昭和4年(1929)には**ケーブル・カーが敷設**されました。麓の清滝から愛宕山七号目あたりまでです。詳細に申しますと、現在の京福電鉄嵐山駅から別路線が清滝川まで走っており、さらに川向こうに渡ると、別途にケーブル・カーの駅が設けられたわけです。後年には、山上遊園地を始め愛宕山ホテルやスキー場も開設されました。しかしながら、太平洋戦争の最中、昭和19年には鉄の供出が強制されたので、やむなく廃線となったのです。
 なお、同じ事態が比叡山・生駒山・男山のケーブル・カーでも起きましたが、戦後になっても**愛宕山ケーブルだけが復活しなかった**という経緯があります。

